サブテーマⅠ
「西川吉之助の生涯とヴォーリズ夫妻との関係」

講師　辻　久孝

記念講演を始める前に、いくつか説明したいことがあります。背広を着ていると手話で話しにくいので、（背広を）脱いでもかまいませんか。お待たせして、申し訳ありません。私がずっと講演をするわけではありません。

スクリーン映像に写っている主テーマ以外に、サブテーマが２つあります。まず、私が父親・西川吉之助について１時間位講演します。その後10分間休憩します。

休憩が終わった後、皆さんが楽しみにされている、有名な竹細工作家・杉田静山先生に講演していただきます。サブテーマは、西川はま子のことについて講演されます。杉田先生も、私と同じく１時間位講演されます。

杉田先生の講演が終わった後20分間休憩します。休憩の間の準備が終わった後、トークショーをします。私がお２人にインタビューをします。その内容はプログラムに載っているとおり、お二人のインタビュー相手は先ほどお話しました杉田静山先生と、もうお１人は杉本はつさんです。１時間トークショーをします。杉本はつさんに半分以上ご質問します。細かいことは後で説明していただきます。よろしくお願いします。それでは、今からサブテーマⅠに沿って講演を始めます。

サブテーマⅠは、スクリーン画面に映っているとおり、西川吉之助の生涯と、もう１つ、この学園と関係があるヴォーリズ夫妻との関係について講演させていただきます。名前を申し遅れました。辻久孝です。よろしくお願いします。

私が西川吉之助の研究を始めたきっかけをお話します。６年前、社会福祉法人滋賀県聴覚障害者福祉協会後援会主催の手話ふれあいフェスティバルがありました。そのとき、会場は滋賀県立聾話学校でした。同校の許可をいただいて、会場として使わせていただきました。そのとき、実行委員の中から１つ案が出ました。せっかく聾話学校で開くのだから、その学校の創立者であり、口話法

教育で有名な西川吉之助についての展示をしてはどうか、という意見が出たのです。そこでだれがするのか、という話し合いになりました。

その結果、わたしは引っかかるものを感じたのですが、私に歴史が得意だからしてはどうか、と勧められました。率直に申し上げると、私は西川吉之助のことにさっぱり興味がありませんでした。理由は、口話法教育が嫌いだからです。むしろ、手話で教育を進めるのがよいと考えています。

実際、小さいときから厳しい口話法教育を受け、嫌な思いをしていました。手話のほうが良いと考えているので、西川吉之助とはかかわりたくないと思っていました。聾話学校の先生が、西川吉之助が娘に対してした口話法教育は良いと私たちに話していたのが、嫌でした。口を読み取れるようになれ、口元を隠しても話が分かるようになれ、と言われていたので、抵抗を感じていました。友達も、同じように思っていると思います。皆さんも、そうではないでしょうか。私もそうでしたので、興味を持っていませんでした。

けれど、良い機会ということで一緒に展示をしました。展示の準備をしていくうちに、厳しい口話法教育についての数多くの資料を調べていくうちに、意外な発見をしました。

先ほど西川吉之助は英語が得意であると話しました。資料の中に、米国から送られてきた英語の

書籍などがあり、驚きました。私は読んでも分かりませんが…。それはそれとしておいといて、写真もたくさんありました。率直に申し上げると、資料を取り出していく途中に本来の目的を忘れて、ついついいろいろな写真を夢中になって見てしまったこともあります。それらの写真や動画も、スクリーン映像に出てきます。［スクリーン画面の、「口話教育の父・西川吉之助」…をなぞっている］［動画を映し出そうとするが、機器の調子が良くなく、断念］

機器の調子が悪くて、映し出すことができませんでした。期待されていた皆さん、申し訳ありません。先ほどお話したとおり、私は口話主義に賛成しません。皆さんも、同じように考えていらっしゃると思います。

また、先ほどの挨拶で石野富志三郎さんがお話しになったように、障害者権利条約に出てきたとおり、ろう者として誇りを持って、手話は言語であると考えています。皆さんも、手話という言語に誇りを持ってください。

今からもとになる資料を示します。滋賀県立聾話学校創立40周年記念誌です。本当は昭和44年に発行する予定でしたが、２年遅れて昭和46年に発行しました。私が小学部の時です。それに載っているいくつかの内容を取り上げて、順番にお話します。よろしくお願いします。

西川吉之助の生い立ちについて、お話します。明治７年（1874年）９月３日、ここ、近江兄弟社学園の近くの近江八幡で生まれました。ニシン漁でもうけた豪商、西川家に生まれました。西川家は本家と分家に分かれ、競い合っていました。彼は、西川伝右衛門家を継ぎました。

ニシン漁の場所は、ここから北のほうに遠く離れた北海道の札幌に近い小樽にありました。漁場の名前は、オショロと言います。そこで獲れたニシンの商売の支配人としての仕事を任されていました。［動画を映し出そうとするが、機器の調子が良くなく、断念］

２つ動画がありますが、機器の調子が良くなく、映し出すことができません。申し訳ありません。２日目の午後のツアーでさらに説明します。定員を超えた後に参加申込をされ、断られた方、申し訳ありません。その代わり、プログラムにいくつかの写真が載っています。それらをもとにお話します。

40頁、41頁（本誌:33－34頁）を見てください。状況の紹介が載っています。ツアーに参加されることができなくなった方は、まずこの頁を見てください。それからいつでもかまいませんので、何かのきっかけで近江八幡に来られたとき、いつか近江八幡にまた来られたとき、前もって私に言っていただけたら、一緒に見て回っても差し支えありません。ご協力したいです。（ツアーに参加されることができない方は、）後でゆっくりこの頁を見てください。

なお、この資料は北海道大会の時と同じものを使っています。北海道からいらっしゃっている中根さんに尋ねてください。何年か前、札幌で大会が開かれましたね。参加された方、いらっしゃいますか。そのときのツアーでお話ししたものと内容が同じです。その内容が（北海道大会の）報告集に載っていると思いますので、それを買って読むのが一番良いのかな、と思います。よろしくお願いします。［スクリーン画面を切り替える］

西川吉之助は、明治40年（1907年）、命じられてアメリカに渡りました。そのときの交通手段は飛行機ではありませんでした。当時は飛行機がありませんでしたね。長い長い間船に乗って、ようやくアメリカにたどり着きました。アメリカに渡った理由は、そこに日本人商社があり、その経営基盤を固めていく必要があるので、そこで商売を進めていったのです。そこの支店長、支配人を歴任して、９年間滞在し、商売をしながら生活していました。アメリカでの生活が終わった後帰国しました。

大正４年（1915年）、帰国したのですが、近江八幡ではなく京都に住みました。妻や子ども達と一緒に暮らしました。

京都に帰った後、三女のはま子が生まれました。大正５年（1916年）に生まれました。その３年後、４歳、満年齢ではなく数え年４歳の時に、はま子が声に反応しないことを不審に思って京都医大耳鼻科に連れて診察を仰ぎました。その結果、医師は残念ながら聾である、という診断を出しました。

この診断に父親、西川吉之助は衝撃を受け、はま子にどのように教育をしたら良いのか、考えを巡らせました。そこで、我が国で最初にできた聾学校、京都盲唖院にはま子を連れて見学しました。そこでは、口話法ではなく手話法で教育をしていました。その様子を見た西川吉之助は、抵抗感を抱きました。健聴者は手話を使わず声で話すから、はま子が京都盲唖院で手話を身につけたとしたら、将来卒業して社会に出たとき、健聴者とコミュニケーションできるかどうか、見通しは暗いと思ったのです。

そこで、京都盲唖院にはま子を入れず、別の方法を探しました。手話ではなく何か別の方法が良い、健聴者に近づける良い方法があったら、と思っていたのです。そこで相談したところ、自宅近くに住んでいたある先生が西川吉之助に情報を提供しました。その先生は、アメリカで口話法が広まっていて、手話法が禁じられているように変わっていると話しました。当時、（アメリカは）口話法が広がり、手話法が禁じられているという状況でした。西川吉之助は口話法ができたら良いという情報を得、それが良いと考えました。

そこで、西川吉之助は英文でも良いので口話法についての本がほしいとその先生に伝え、アメリカから本を送ってもらいました。

西川吉之助は送られた本をがんばって読み解き、研究しました。研究して分かったことをもとに、はま子に口話法教育を必死にしました。口形の読み取りや発音の訓練を一生懸命施しました。

次に、大正９年（1920年）、アメリカからジョンダットライト氏による通信講義録を取り寄せ、それをもとにはま子に口話法教育を続けてしました。［スクリーン画面を切り替える］

大正10年（1921年）、西川吉之助は家族を連れて近江八幡に帰り、そこで生活し始めました。近江八幡で暮らすようになってからも、はま子に続けて口話法教育を一生懸命行いました。

大正14年（1925年）頑張って口話法教育をした成果が出て、はま子の成績は小学校４年生以上と認められました。

はま子の口話法教育の成果を見た西川吉之助は、自分の娘だけを口話法で教えるのはもったいないと考えました。世間には手話法教育で聾の子どもを教育したくないと考えている親達もいるということで、その親達にも自分の娘の口話法教育の成果を宣伝しようと考えました。

当時は、テレビはありませんでした。そこで、ラジオを使って宣伝しました。健聴者はラジオを通して情報を得ていました。西川吉之助は娘をラジオのマイクの前に立たせて、声を出して話させました。そうすることで、西川吉之助は自分の娘が聾であるけれど声を出して話すことができることを、宣伝したのです。

ラジオを通してはま子の声をきいた、聾の子どもを持つ親達は「自分の子どもはきこえないから声を出して話すことはできない。手話で話すしか方法はない」と思い込んでいたので、驚きました。「きこえなくても声を出して話すことができる。それなら、自分の子どもにもそのような教育を受けさせたい」と思い始め、口話法で聾の子どもを教育することを選択する親が増えました。そのような出来事があって、手話法教育による教育の流れが口話法教育による教育の流れに変わっていったのです。

西川吉之助はお金持ちでしたので、２月、自分がしてきた口話法教育についての本を著し、発行

しました。本の題は、「口話式聾教育」で、何冊か発行しました。本の発行は全て自分のお金でしました。本当にお金持ちでした。本の送料も送る相手に請求せず、全て自分が支払ったのです。

さらに、西川吉之助は聾の子ども達を集めて口話法教育を行おうと考えました。塾のような形で行おうとしたわけです。７月に西川聾口話研究所を設立しました。自分の商家の向かいに空き家があったので、それを借りて数名の聾の子ども達を集め、厳しい口話法教育を行いました。当時はまだ滋賀県内に聾学校がありませんでした。

以前、はま子の声のラジオ放送をきいた文部省関係者が関心を抱き、西川吉之助に文部省主催の聾教育講演会の講師を嘱託しました。

日本聾口話普及会を組織し、副会長に選ばれて活動しました。その時に有名な３人がいます。１人は滋賀の西川です。もう１人は東京の川本です。あともう１人は名古屋の橋村です。この有名な３人が中心になって熱心に活動を進めました。

京都では明治時代から盲唖院がありました。今まで話してきたように当時の滋賀では、京都まで行って教育を受けた聾の子どもが多かったです。お金持ちの子どもが近くて便利なところから通っていました。盲唖院の教育は義務教育ではありませんでした。お金持ちの家の子どもか、学校の近くに住んでいる子どもが通って学んでいたのです。そのような教育を受ける機会に恵まれた子どもは、少数派でした。

より多くの聾の子どもを教育しようと思うと、西川聾口話研究所の規模では限界がありました。そこで、県議会に聾の子どもたちを連れて実地授業を行ってみせました。授業を見た県議会議員は感銘を受け、県立聾学校の設立の願いは受け入れられました。

昭和３年、成長したはま子が県立八幡高等女学校に入学しました。皆さんは健聴者の学校に入学して学べるかどうか、と考えるでしょう。実際どうなのかはともかく昔は、男子は中学校、女子は高等女学校に通っていました。今は、男女共学の県立八幡高等学校になっています。会場の近くにあります。彼女はその高等女学校を卒業しました。

はま子が県立八幡高等女学校に入学した１ヶ月後の５月16日、公立の口話学校が初めてできました。校名は滋賀県立聾話学校です。初代の校長には、西川吉之助が就きました。教頭や事務長などの適任者がいなかったので、その職務の仕事も兼任していました。聾話学校開校に伴って個人経営の西川聾口話研究所を閉鎖しました。研究所の中にあった書籍などを聾話学校に移し、それらを使って教えました。

学校創立当時の年間予算額は3000円でした。当時としては高いとは思いますが、私は、詳しいことは知りません。ですが、3000円だけでは学校を運営できませんでした。不足分は、西川吉之助が私財を注ぎ込みました。私財を注ぎ込んで学校の運営を支援したのです。

昭和７年３月、西川吉之助は東京私立聾学校の授業を嘱託されました。ただ、西川吉之助は聾学校教諭の資格を持っていませんでした。師範学校卒業ではなかったので、教員資格を持っていなかったのです。そこで、文部省が彼の実績を認めて公立私立聾唖学校たることを認可しました。

昭和８年、滋賀県立聾話学校校長に任じられましたが、家財を使い果たして学校門前の借家に引っ越しました。これといった荷物を持たず家族とともに引っ越しました。引っ越したのは昭和８年です。覚えてください。

昭和９年３月、公立聾唖学校長に正式に任じられました。その時から校長を務め続けましたが、昭和15年７月18日午前２時30分頃急逝しました。そういった歴史があります。以上、西川吉之助の生涯を、順を追って簡単に説明しました。

これで終わりではありません。続きがあります。また１つ話したいことがあります。時間がまだあります。

西川吉之助の生涯を詳しく調べてみると、３点、謎があります。それぞれの謎について説明します。まず、西川吉之助の一家が学校門前の借家に引っ越したのはいつか、ということです。［スクリーン画面を切り替える］

このスクリーンの画面にあるように、本によっていくつかの説が出てきています。２年前の兵庫大会で、この内容のレポート発表をしました。同じ内容の繰り返しになって申し訳ありません。初めてご覧になる方々もいますので、その方々は見てください。

見てのとおり、まちまちですね。おかしいですね。どの説が正しいのか迷いました。そこで改めて調べてみたところ、北海道の小樽市の資料館でこのような資料を見つけました。［小樽市で見つけた資料をスクリーン画面に映し出す］

この資料は、小樽市でのニシン漁の漁獲量の移り変わりのグラフです。今はニシン漁をしていません。昭和２９年に終わりました。昭和７年の所を見ると豊漁でしたので、西川吉之助の家がつぶれるわけがありませんよね。昭和12年の所を見てみると、ニシンが獲れなくなりました。だからそのときもうけがなくなり、私財を使い尽くし家がつぶれてしまったのです。だから、西川吉之助の家がつぶれたのは昭和12年以降である、と根拠をもって言えるわけです。

ところで、先ほど私が前々回の大会でレポート発表をしたことをお話ししました。だから昭和８年に家がつぶれて借家に引っ越したというのは正しくないことが分かりました。つまり、先ほど出した西川吉之助の引っ越しの時期は間違いということが分かったのです。昭和11年か昭和12年のどちらかに引っ越したということになります。

あの後もいろいろ調べたところ、１つ新しい情報が見つかりました。今までとはまた違った証拠が見つかったのです。その証拠をこれから紹介します。

長女の昌子が昭和10年のことを書いた回想録があります。先ほど紹介した昭和12年の記録とこの回想録は同じ人が書いたので、どちらが正しいのか、と疑問に思いました。印刷会社が本の内容を誤って印刷した可能性もある、と考えられます。実際の所どうなのかは、改めて調べる必要があります。今はまだ西川吉之助の引っ越した時期を断定できません。続けて調査したいと思います。先ほど見つけた新たな史実に驚き、さらに調べなければ、と思った次第です。１つ目の謎については、終わりです。［スクリーン画面を切り替える］

第２の謎です。西川吉之助の「急逝」とは何か、について説明します。これは前回の福岡大会で発表しました。初めての方々にも分かるように説明します。［スクリーン画面を切り替える］

滋賀県立聾話学校の「創立四十年誌」からの抜粋です。東田一夫先生は皆さんもご存じですね。彼は長い間西川吉之助の死亡について沈黙を守っていました。

西川吉之助の死に立ち会ったのは２人でした。１人は医師の東田一夫です。臨終の時に医師が死亡したこと、死亡した時間を確認し、その死亡証明書を作りますね。もう１人は、西川吉之助の妻です。

東田一夫と西川吉之助の妻は、長い間西川吉之助の死について沈黙を守っていました。しかし、ついにその死の真相を話しました。

東田一夫と西川吉之助の妻の話によると、西川吉之助は長い間患っていたが、病気が直接の原因ではなく、自殺だったということです。

東田一夫らは失礼を承知しながら、死後30年余り経って「創立四十年誌」に西川吉之助の死の真相の告白を載せたのです。それによると、率直に言って自殺であったということです。この告白は、西川吉之助の死因が自殺であったことの明確な証拠です。

この２人が真相を告白した以外に、新しい情報が見つかりました。この告白よりさかのぼった「湖畔の声」昭和42年２月号にあります。計算すると、「創立四十年誌」より４年前のことです。娘の昌子が父親の死は自決（＝自殺）だったと言っています。

西川吉之助の死因は自殺であることは、どの研究者も認めています。ただ私は西川吉之助が死んだ理由は分からず、詳しく調べられてもいません。

３つ目の謎です。西川吉之助は語学に優れています。このことは、私だけでなく他の研究者も認めています。英語など数ヶ国語を話すことができます。ロシア語も話すことができます。

けれど、西川吉之助は教育の専門家ではありません。ましてや、聾教育の専門家でもありません。つまり、教育のプロではなかったのです。それなのに、数多くの聾教育の専門書籍を翻訳できたのはなぜなのでしょうか。不思議ですね。それについて学びたいと思います。

実は、西川吉之助本人ではなくヴォーリズからの協力によるものが大きい、と想像できます。

ヴォーリズは建築が専門の人です。彼の奥さん、満喜子は幼児教育の専門家です。英語も得意です。アメリカに行った経験もあります。満喜子が西川

吉之助を支援したのが大きいというわけです。本人だけの力によるものではない、と考えられます。けれど、ヴォーリズだけではありません。他にも目に見えないところで頑張って支援した人がいます。

長女の昌子も頑張って父を支援していました。翻訳を献身的に頑張ってしていました。ヴォーリズ、満喜子、昌子の３人の支援の賜物です。西川吉之助本人だけではできたとはいえません。だから３人の努力と支援によって、西川吉之助は口話法教育の推進をすることができた、といえます。話が横道にそれますが、ヴォーリズ夫妻について説明します。詳しく説明する時間はありませんので、簡単にまとめて説明します。(「ヴォーリズと満喜子」)

満喜子は、神戸女学院で音楽を学んだ後アメリカに留学しました。ヴォーリズと満喜子が出会ったきっかけを紹介します。満喜子の兄の結婚先、大阪で満喜子は偶然ヴォーリズと出会いました。ヴォーリズは満喜子に一目ぼれしました。ヴォーリズは満喜子に熱心に求婚し、その末結ばれました。大正８年に結婚しました。その後夫婦はキリスト教会で伝道活動に励みました。

そして、ここに近江兄弟社の基を築きました。そのような夫婦の生涯があるというわけです。昭和16年、ヴォーリズは日本人の姓に変わり、日本人に帰化したのです。つまり、ヴォーリズは妻の実家の姓に変え、下の名前も日本人の名前に変えました。「米来留（メレル)」という名前です。名前を変える前の名前は、メレル・ヴォーリズでした。

明日のツアーで紹介するので、ツアーに参加される方々は分かると思います。今、少し紹介します。「米来留」の『米』はアメリカの意味で、「アメリカから来る、留まる」という意味になるという話をきいて、なるほど、と思いました。

夫婦は死後も２人の最も愛した町・近江八幡の恒春園に眠っています。つまり、ずっと日本にとどまっているということです。

もう１つエピソードを紹介します。(「ハイド記念館（清友園幼稚園)」)。

この本館の裏の、近江兄弟社学園の敷地内の向こうにハイド記念館があります。新しい建物が建ち並ぶ中、１つだけ古い建物群があります。ハイド記念館と教育会館の２つの建物が隣り合って建っています。

元々近江兄弟社学園は幼稚園だけでしたが、終戦後、小学校、中学校、高等学校と増えました。つまり、今は幼稚園から高等学校まで全ての学校が１つの敷地内にあるのです。

別の土地で家を借りて幼稚園を経営していたのですが、ここに新しい建物を建てて移りました。ハイド記念館の由来は、アインダ・ハイドの寄付をもとに建てました。満喜子はアメリカに行っていたときに出会ったエイ・エイ・ハイド夫人から自分の貯金を全て満喜子の仕事に役立てるように、と寄付しました。全部で３万ドルでした。高いのかどうかは分かりませんが、たぶん高い金額だと思います。

ハイド夫人についての情報をきいたところ、ハイド夫人は聾でした。耳もきこえず話すこともできなかったのですが、貯金を全部寄付しました。このことは聾と関係があります。だから、満喜子はハイド夫人と付き合ったために聾に対して少し理解があったのです。それで、聾の子どもに接して教育をすることができたのです。

ところが、その頃アメリカは手話を禁じて口話法で教育をしていたので、その方法を日本に持ち込んで教育を進めたというわけなのです。そのような歴史があったので、仕方がないと思います。逆に、手話法で教育を進めていたら、日本でも手話法で教育を進めていたかもしれません。

満喜子はアメリカで進められていた口話法教育のやり方を覚えて、日本でそのやり方で教育を進めたのですから、満喜子のことを良いとか悪いとかいうわけではなく、当時の聾教育の背景や時代の流れがあったうえでの行動ですから、そういう行動につながったわけなのです。そのことをはっきりと理解しておいたら、良い面があると思います。

これぐらいで、私からの講演を終わります。これで、講演が本当に終わるわけではありません。続けて、杉田先生から詳しい講演があります。この講演の後でまとめるのではなく、さらにその次のトークショーもあるので、その後でまとめます。それでは、サブテーマＩの講演を終わります。ご清聴（視）ありがとうございました。